

太陽光発電2017年夏

日本でシェア増加、2017年出荷は世界9～10GW目指す

ジンコ・ソーラー 銭晶副会長

ジンコ・ソーラーは、2016年の太陽電池モジュール出荷量が6.65GWで世界首位を達成。2017年第1四半期においても、モジュール出荷量世界で2GWを突破し2,068MWに到達した。2017年も引き続き出荷量を拡大するほか、中東のアブダビでは、丸紅とともに1,170MWの超巨大な太陽光発電所建設に携わる。銭晶副会長に、世界と日本における今後の事業展開・戦略のあり方を伺った。

ー2017年第1四半期で世界2GW出荷達成という成績をどう見る

銭晶 ジンコ・ソーラーのモジュールへの需要が非常に旺盛だ。その中で、日本における同時期の出荷量は200MW程度と、グローバルでの出荷量のうち10%程度を占めている。日本の太陽光発電モジュール市場は2016年より確かに縮小しているが、国内においてジンコ・ソーラーのシェアが増加しているのは明るい材料だ。

ーアブダビではどのような点が評価を受け、モジュール採用が決定したのか

銭晶 アブダビのプロジェクトでは、ジンコ・ソーラーのPERCモジュール72セル搭載・出力360Wのパネルが使用される予定だ。モジュールメーカーの業界全体で見ても、72セルタイプにおいてとくに高い出力を実現している。数ある企業の中で、丸紅との協力を行っているのは、従来より、両社の理念と業界地位に近いほか、協力に意欲的で、同時に両社が中東の太陽光発電市場が好調ととらえているからだ。

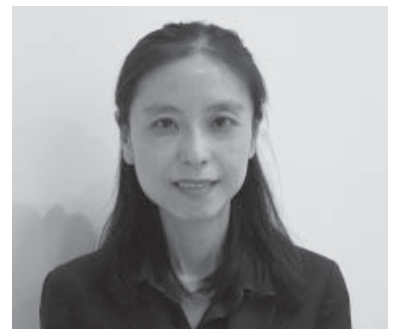
ーアブダビでの発電コストは

銭晶 発電した電力はキロワットアワー当たりの価格が、非常に安価な価格・コストで販売する。安価な発電コストを実現している要因として、豊富な日射量のほか、政府の協力で広大な土地が容易に確保できたこと、アブダビ水電力庁という政府系機関もプ

ロジェクトに60%出資していることで、事業の信用が高まり、リスクが抑えられていることが大きい。また税金面での優遇も受け、さらに三菱UFJ銀行や三井住友銀行など、著名な金融機関からの資金調達が行えることなどからも、低コストでの発電を実現している。このほかアブダビでは、火力発電にかかるコストがもともと高いことも、同国における太陽光発電へのニーズが発生している要因の1つに挙げられる。

ー日本での今後の製品ラインアップは

銭晶 ハーフカットタイプの60セル搭載モジュールで19.37%の変換効率、出力は320Wまで高めた製品などを新たに開発した。今後の本格的な需要を見込む住宅向けには、より効率・出力を高めていく必要があり、ハーフカットセルによるモジュールで、ほかのメーカーと比較しても高水準の出力を実現したと自負している。さらに日本では、パネルの表と裏双方で発電可能な両面発電モジュールも製品化した。両面発電型のモジュールは、技術的には特別難しいものではないのだが、製造にかかるコストの課題があり、実際に製品化できているのは中国のメーカーでも2、3社だけとなっている。適用できる地域などは限定されるものの、例えば北海道のような、地面の積雪からの反射光によっても発電が見込める地域などで提案を行っていく。



銭晶氏

ー今後の出荷量目標などは

銭晶 最近では中国で新たに2カ所の工場も稼働を開始したが、ジンコ・ソーラーのモジュール生産能力以上に需要が発生しているのが現状の課題だ。こうした中で、2016年の日本でのモジュール出荷量は600MW～700MW程度だったが、2017年については700MW～800MWを目指す。また世界では2016年より40%程度増となる9～10GWを目指している。モジュールの価格の動きについては、発電効率・性能を高めることが、コストの低下につながるととらえ製造・開発に取り組んでいる。モジュールの価格を下げても、それにより製品の品質が低下しては意味がない。